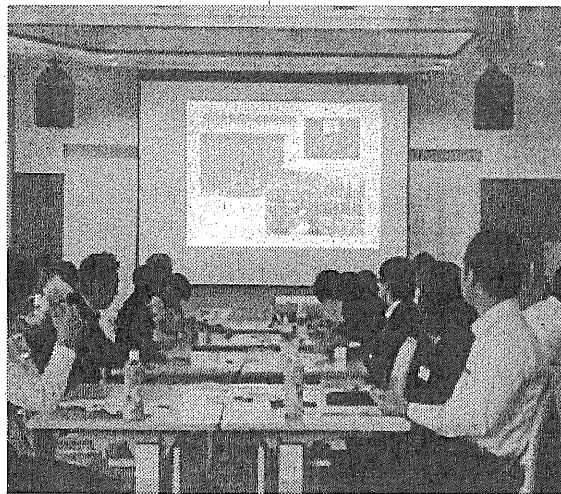


# 経験学習どう活かす

広島大学高等  
教育センター シンポ「大学と学生」

学生の目線から大学の在り方を問う「シンポジウム『大学と学生』」が、九月二十三日、広島大学高等教育研究開発センターの主催により同大学学生会館で開催された。今年で三回目を迎える今回のシンポジウムでは、「大学における経験学習：学生の経験をどのように学習に活かすか」と題したテーマのもと、全国から馳せ参じた学生や大学教職員らが活発な議論を展開した。



「シンポ」大学と学生」  
ーニングやボランティア、あるいはインターンシップといった名前を付して経験学習を積極的に導入する大学が増えてきている。こうした活動は、それ以外の学習とどのように関連しているの

か。また、効果的に実施するうえで大学側が克服すべき課題は何か。これらを明らかにするため、実際に活動経験を有する現役の学部学生が、自らの体験に基づいた発表を行い、参加者同士の意見交換や情報共有を促す企画である。

今回からの新しい試みとして、発表者となる学部学生を全国から公募した。厳しい審査を見過越したのは、永友雄也(長崎大学)「経験学習の可視化について」、田代智也(千葉大学)「グローバルボランティアと体験学習」、黒田 昌・山田智子(金沢大学)「まちづくりインターン

シップからみる経験学習」、小林理緒・中見茉莉帆・合田優香・南 早紀(関西大学)「学生だからこそ行える大学の防災活動」の四件(敬称略)である。

当日は、東京大学大学総合教育研究センターの木村 充特任研究員による基調講演に始まり、四件の学生報告を受けた後、村上むつ子氏(国際

基督教大学)サーピス・ライニング・ネットワーク)からのコメントで前半がまとめられた。続く討論では、同センターの佐藤万知准教授がファシリテーターを務めてのグループディスカッションが行われた。

全体として、経験学習の意義は皆が認めることであるものの、活動に従事した学生は、単位付

与の是非を含む評価の面、活動の継続性、適切な組織形態などに関して課題を認識していることが浮き彫りとなった。

なお、この「シンポジウム『大学と学生』」は、来年も学部学生による発表を公募する形で開催する予定である。(文責：岐阜大学教育推進・学生支援機構准教授 廣内大輔)